

令和元年6月21日現在

機関番号：33301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K01679

研究課題名(和文) 近世蹴鞠の大衆化の構造：『中撰実又記』(1646)の世界

研究課題名(英文) The World of "Chusen jitsuyuki", 1646, a popular football textbook in Edo

研究代表者

大久保 英哲 (Okubo, Hideaki)

金沢星稜大学・人間科学部・特任教授

研究者番号：30194103

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近世蹴鞠の大衆化の構造を明らかにするための基礎的な史料である右近政光『中撰実又記』(ちゅうせんじつゆうき)(1646・平野神社本)を元に翻刻及び現代語訳を行った。これらの成果は、「渡辺融氏・近世蹴鞠研究講義」、「外郎右近政光著『中撰実又記』概要」、「外郎右近政光著『蹴鞠要法十七箇条』翻刻ならびに現代語訳」、「再現から読み解く『中撰実又記・下巻』」の3つの研究報告とともに、平成31年3月『近世蹴鞠の大衆化の構造 - 『中撰実又記』(1646)の世界』(全299ページ)として能登印刷株式会社出版部(金沢)から刊行された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「蹴鞠」は現代ではほとんど廃れてしまい、わずかに公家鞠のみが京都蹴鞠保存会等を中心に保存状態にあるが、前近代においては、「歌鞠両道」とも言われ、「和歌」と並称されるほどの重要文化ジャンルであった。また近世には外郎鞠ないし地下鞠と呼ばれる蹴鞠の大衆化が進行していた。コミュニケーションの大衆化された蹴鞠の構造を明らかにしようとするのが本研究の目的である。2020年オリンピック東京大会を機に、この大衆化された蹴鞠の構造的性質や実態を明らかにしつつ、一部動作の復元を行い、日本の知られざるスポーツ文化の一端を世界に発信することことが可能となる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we deciphered and made contemporary translations for reprinting of "Chusen Jitsuyuki" written by Ukon Masamitsu (1646, Hirano Jinja Shrine version in Edo period), which is a basic historical material for clarifying the structure of popularization of Kemari, Japanese football in the early modern period. The result of this study was translated into modern Japanese and published "The structure of the popularization of Kemari in the early Edo period; The World of Chusen Jitsuyuki - (299 pages)" by Noto Printing Publishing Co., Ltd. (Kanazawa) in March 2019 as a Report Book, including 4 other research papers.

研究分野：スポーツ史

キーワード：蹴鞠 地下鞠 外郎鞠 右近政光 中撰実又記

## 1. 研究開始当初の背景

「蹴鞠」は現代ではほとんど廃れてしまい保存状態にあるが、前近代においては、「歌鞠両道」とも言われ、「和歌」と並称されるほどの重要文化ジャンルであった。それにも関わらず、和歌研究に比して、蹴鞠研究は活発とは言えず、歴史的に未解明な部分が多い。これは、蹴鞠技術やフォーメーションなどスポーツ技術史の知識を必要とするからである。前近代の蹴鞠の実態を明らかにするには、文化史・文学研究者の知見とスポーツ史の知見を融合させた新たな研究体制の構築が必要である。本研究では日本古典文化史・文学研究者の村戸弥生氏の研究協力を得ながら、主として『中撰実又記』の解読に取り組み、現代語訳を行う。さらにその内容に基づいて、スポーツ人類学とフットボールプレイヤーの知見と技能を有する阿羅功也氏の協力を得て、地下鞠(外郎鞠)の蹴鞠技術の再現に取り組む。

蹴鞠研究は約 20 日前、故桑山浩然(1937~2006)、渡辺融氏の主導により進展をみた。平成 2 年度科研費による共同研究「中・近世における蹴鞠道の伝授システムに関する研究」(代表・渡辺)蹴鞠関係資料の調査が進められた。それらの成果は、平成 3 年度科研費成果報告書『蹴鞠技術変遷の研究』(代表・桑山)、平成 5 年の桑山・渡辺共著『蹴鞠の研究 公家鞠の成立』東京大学出版会刊行により公開された。『蹴鞠技術変遷の研究』において、研究協力者として蹴鞠研究に携わっていた村戸弥生氏は、平成 13 年度科研費補助金により、著書として『遊戯から芸道へ 日本中世における芸能の変容』玉川大学出版会を刊行した。また、同じく『蹴鞠技術変遷の研究』において研究協力者であった稲垣弘明氏が、平成 20 年に著書『中世蹴鞠史の研究 鞠会を中心に』思文閣出版を刊行した。桑山・渡辺の著書と合わせ、これら蹴鞠専門研究書によって、古代から戦国期までの蹴鞠史の大まかなアウトラインがようやく描きだされた段階である。よって今後の研究を発展させるには、古代から戦国期までの蹴鞠研究のさらなる充実と、近世の蹴鞠研究に着手し、進展させるべきところであるが、近年は蹴鞠関係の論考がまれに見られるのみで、全くの沈滞状況にある。スポーツ史研究者大久保英哲はこうした状況に鑑み、平成 25 年から村戸弥生氏と毎週定期的な研究会を開催し、新たな蹴鞠史研究に着手している。平成 27 年 8 月に開催された日本体育学会第 66 回大会(国土館大学)における体育史学会ワークショップ「『中撰実又記』(1646)の蹴鞠技術と作法」はこうした共同研究の成果の一部である。本研究はこうした土台の上に構築される。

## 2. 研究目的

蹴鞠研究は現在、古代から戦国期までの蹴鞠史の概要が描かれているが、近世には未着手状態である。「蹴鞠」は江戸期(17 世紀)に入って、公家や大名などの占有状態から、富裕な町人層にまで拡大、「外郎鞠」として大衆スポーツ化が進んだ。この大衆蹴鞠「外郎鞠」(本研究では以下「地下鞠」と称する)の解明はスポーツ史・日本文化史にとって極めて重要である。そこで本研究では、在野の芸能史研究者村戸弥生氏の協力を得、『難波家蹴鞠関係資料』中の「地下鞠」指南本といふべき右近政光『中撰実又記』(ちゅうせんじつゆうき)の翻刻・解読作業を行うとともに、「公家鞠」と比較しつつ、大衆スポーツ化された蹴鞠、「地下鞠」の特色とその技術構造をスポーツ史の立場から明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究に使用する『中撰実又記』は正保 3(1646)年 8 月 6 日付、外郎右近政光から橋本源左衛門宛の奥書を持つ地下(外郎派)の蹴鞠口伝書である。宮内庁書陵部(三部)、東京国立博物館(天保 3(1832)写一冊)、無窮会神習文庫、天理大学吉田文庫(「古今中撰実又記」、一冊)(国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」による)のほか、東京家政大学大江文庫が見られる。本研究では滋賀県大津平野神社難波家旧蔵蹴鞠文書『中撰実又記』上下二冊写本を用い、その翻刻・解読を行い、その内容の詳細な読解をおこなった。

なおこの過程で他の写本との異同も検討し、大津平野神社本が最も古体を呈した底本であろうとの推定を行った。さらに、公家鞠など他流の蹴鞠書との比較検討から、近世蹴鞠即ち地下鞠(外郎派)と呼ばれる大衆化された蹴鞠の構造と実態を、芸態的、儀礼的、社会的位置づけの観点から解明することを試みた。

## 4. 研究成果

### (1) 学術的な特色・独創的な点

本研究の特色は、スポーツ史と文学史分野出身の研究者が共同研究することで多面的に蹴鞠を解明したことである。『難波家蹴鞠関係資料』には多種多様の資料があり、対象に応じて史学的手法・文学的手法と解析方法を応用することができる。また文献の上での解析のみならず、スポーツ史家が研究を主導したことで、近世の蹴鞠の実技構造が明らかにされ、さらにそれらの動作を復元的に解明した点が大きな特色である。

本研究の結果、近世に至って大衆化された蹴鞠の構造的特質や実態の一部が明らかにされた。その特色は、飛鳥井家、難波家、御子左家など公家鞠の様式や作法を意識しながらも、簡略化していること、技術的には公家鞠が多用する延足(比較的遠いところに来た鞠をスライディングしながら蹴り上げる動作)よりも、「身に沿う鞠」(体に近いところで身に添わせるように行うリフティング)系の動作が重視されること。鞠を落とさ

ないことを重視するため、公家鞠では忌避される屈膝によるリフティングを「地下」らしさとして積極的に取り入れることなどである。このように地下鞠の一部構造が明らかにされて、近世蹴鞠の総合的な解明に寄与することとなった。

## (2) 今後の研究に向けた課題

本研究の当初計画では、2020年東京オリンピック・パラリンピック開催を機会に、公家鞠のみではない日本蹴鞠の多様性・文化性について、「地下鞠」という大衆化された蹴鞠の復元実技映像等を含んだホームページないしDVDなどによる発信を行いたいと考えていた。勝ち負けではない価値観に裏付けられた日本の歴史的な地下鞠をそのプレーの再現とともに世界に発信できるならば、まさに日本固有の古くて新しいスポーツ文化を、21世紀オлимпズムに一石を投ずる形で世界的に発信が可能になるからである。しかしこの点については、なお引き続き課題としなければならない。その主な理由は、前に述べたように、まず『中撰実又記』の翻刻、解読、現代語訳に予想外に大きなエネルギーと時間を要したためである。しかしながら、村戸弥生氏の尽力によって、日本国内に8種現存する『中撰実又記』の諸本研究を厳密に展開した結果、底本を平野神社本と確定し、試みの訳ながら現代文訳を提示することができた。したがって、その技術復元と実技映像化は今後急速に進むものと考えられる。現に、研究協力者阿羅功也氏は『中撰実又記』に見られる記述から、いくつかの技の技術復元を試み、映像を取り込みながら、その特徴の解明に当たった研究を展開しつつある(阿羅功也「再現という手法を用いた地下鞠技術の研究『中撰実又記・下巻』を中心に」金沢大学人間社会環境研究科修士論文、2019年3月)。ただこの阿羅功也氏の研究は、単独の鞠足技術復元に着眼が置かれ、蹴鞠の代わりに現代のサッカーマスコットボールを用い、また服装はトレーニングウェア、場所も体育館フロアを用いるなど、鞠場や鞠足(プレーヤー)の人数なども全く時代性を考慮していない段階にある。しかしながらこの阿羅功也氏の研究を手がかりに、蹴鞠の制作者に協力を求め、類似した蹴鞠の入手、鞠足たちの育成、鞠場や鞠垣の再現、さらには服装、作法や言葉がけなどに至るまで、鞠足の公家鞠ないし大名鞠などと比較対照しながら地下鞠の再現を図りたい。

## 5. 主な発表論文等

### 【雑誌論文】(計1件)

村戸 弥生「江戸初期蹴鞠書『中撰実又記』研究から地下外郎派蹴鞠復元へ向けて」、体育史学会、「体育史研究」36号、2019、61-72、「査読有」

<https://taiikushi.org/db/database.cgi>

### 【学会発表】(計6件)

村戸 弥生「蹴鞠口伝書読解方法について：江戸初期蹴鞠書『中撰実又記』研究から地下外郎派蹴鞠復元へ向けて」、体育史学会第7回大会、2018

大久保 英哲「日本江戸期の大衆蹴鞠技術」、台湾国立體育運動大學、2017、大久保英哲『3年スポーツフィールド演習報告書「海外のスポーツ文化と歴史をフィールドする」2018 Sports Field in Taiwan』、2018

阿羅 功也「大衆蹴鞠の形態について」、北陸体育学会、2018、北陸体育学会『北陸体育学会紀要』54号、2018

阿羅 功也「地下鞠の技術構造について：中撰実又記をもとに」、日本体育学会第69回大会、2018

大久保 英哲「日本江戸期の大衆蹴鞠技術」、台湾国立高雄師範大学、大久保英哲、2017、『3年スポーツフィールド演習報告書「海外のスポーツ文化と歴史をフィールドする」2017 Sports Field in Kaohsiung, Taiwan』、2017

大久保 英哲「日本江戸期の大衆蹴鞠『中撰実又記』(1646)から」、台湾国立台湾師範大学研究会、大久保英哲、2016、『3年スポーツフィールド演習報告書「海外のスポーツ文化と歴史をフィールドする」2016 Sports Field in Taipei』、2016

### 【図書】(計1件)

大久保 英哲『近世蹴鞠の大衆化の構造『中撰実又記』(1646)の世界』、能登印刷出版部、2019、全299頁

本書は本科研費研究の冊子体報告書である。以下の内容からなる。

大久保 英哲、研究の概要と研究経過

[研究報告 1] 村戸弥生、渡辺融氏・近世蹴鞠研究講義（2016年）近世蹴鞠研究講義 / 講義プリント / 渡辺融氏・蹴鞠研究成果一覧 / 近世地下鞠研究関連主要論文（渡辺氏のもの以外）

[研究報告 2-1] 村戸弥生、外郎右近政光著『中撰実又記』概要（『中撰実又記』関連の旧稿）（参考資料）  
村戸弥生、平野神社蔵難波家旧蔵蹴鞠文書本『中撰実又記』上下巻翻刻ならびに現代語訳

【凡例】

【上巻】

（上序）・（上1）かゝりの法・（上2）地の拵様・（上3）軒の付様・（上4）網の掛様・（上5・6）木の名付上下座・（上7）木の植様・（上8）かゝりの松に神道の事・（上9）かゝりの内二有神事・（上10）三鳥の大事、為明公ノ御説・（上11）水之打様付はき様・（上12）装束着仕様・（上13）沓之事・（上14）扇子鼻帟・（上15）圓座二着様・（上16）鞠の入やう付名所・（上17）松梶の鞠・（上18）神前の鞠・（上19）追善の鞠・（上20）かゝりに入様付上下定座・（上21）替り様・（上22）竿（竹冠に高）の法・（上23）袴沓の緒とけたる仕様・（上24）鞠装束次第官有る事・（上25）腰に扇子を指事・（上26）音の掛様・（上27）蹴鞠のほめやう・（上28）鞠の名二相違有事

【下巻】

（下序）・（下1）身の置様・（下2）心眼の事付一暮一座二難疵有事・（下3）拍子の習・（下4）縮開の習・（下5）初心を取立る傳法・（下6）沓下付沓音・（下7）上鞠の習・（下8）地鞠・（下9）請足の習・（下10）高足の習秘・（下11）寄の身足・（下12）打緒の秘傳・（下13）留足秘傳・（下14）蹴貫の秘足・（下15）立別の習秘・（下16）色移の留・（下17）つくはひ打緒を留足・（下18）渡し鞠の足・（下19）渡し鞠を請取足・（下20）はねの足・（下21）はこひ足・（下22）のへの足・（下23）廻足の習・（下24）流しの習・（下25）落たる鞠を取上げるに習有・ 256  
（下26）身意二病有事・（下27）目付の習・（下28）蹴納取事・（下29）秘曲・（下30）蹴鞠二法度有・（下31）身意目足定法の学・（下32）座鋪鞠の事・（下跋）

[研究報告 2-2]

村戸弥生、外郎右近政光著『蹴鞠要法十七箇条』翻刻ならびに現代語訳 宮内庁書陵部蔵飛鳥井家旧蔵本『蹴鞠要法』（函号一六三・八六一）

[研究報告 3]

阿羅功也、「再現」から読み解く『中撰実又記・下巻』

6. 研究組織

（2）研究協力者

研究協力者氏名：村戸 弥生

ローマ字氏名：(MURATO, Yayoi)

所属研究機関名：金沢美術工芸大学

職名：非常勤講師

研究者番号：無

研究協力者氏名：阿羅 功也

ローマ字氏名：(ARA, Koya)

所属研究機関名：金沢星稜大学

部局名：人間科学部

職名：助手

研究者番号：90781691

\* 科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。